

早稲田大学体育各部における入学形態と部活動に対する参加動機の研究

Application forms in various parts of Waseda University and the Ministry of Physical Activity Participation for the Study of motivation

1K05B165

中山 明信

指導教員

主査 原田宗彦先生

副査 太田章先生

第 1 章 緒言

2007 年、早稲田大学は創立 125 周年を迎えるに当たり、体育各部 43 部の強化に力を入れた。

その結果、多くの部が各大会で優勝及び上位入賞を果たしている。その背景には、スポーツ推薦制度の充実によって有力選手を獲得し、強化に成功できたことがある。また、「ワセダ」の看板を背負って競技を続けたいという選手が一般入試等の受験方法を経て早稲田大学に入学し、各部に入部しており、部活動の底辺の拡大に繋がっている。

一方で、近年、各大学は学生確保のためにスポーツ推薦など多様な入学形態を取り入れた。

その結果、大学スポーツの勝利至上主義に拍車がかかっている現状がある。そのため人間教育の面で大学側の目が行き届かないという問題も起き、一部の大学の部員の不祥事も相次いで報告されている。大学スポーツの在り方が問われている現状の中で、部員がどのような動機で部活に参加しているかを把握することは重要であると考えられる。本研究は、アンケート調査により、部員の参加動機を入学形態ごとに比較し、1. スポーツ実績評価群(スポーツ推薦、自己推薦利用)と 2. スポーツ実績非評価群(付属校出身、指定校推薦、一般入試)に分けて、両者にどのような違いが出るかを分析することを目的とする。

第 2 章 研究方法

調査対象: 早稲田大学体育各部に所属する学生選手 140 名を対象にした。

調査時期: 平成 20 年の 11 月初旬から中旬に

かけて行った。

調査票 : 山本(1990)が用いた部活動の参加動機に関する質問 25 項目を参考に作成した。

研究方法: SPSS 15.0J for Windows を用いて分析した。

第 3 章 結果・考察

仮説 1: レギュラー及び準レギュラーの選手の分布の割合はスポーツ実績評価群の方が高いと考えられる。

仮説 2: スポーツ実績評価群の方が部活動に自由な雰囲気を求めていると考えられる。

仮説 3: スポーツ実績評価群の学生は卒業後の競技生活を念頭に置き、就職を想定して部活動が続いていると思われる。

仮説 4: スポーツ実績非評価群の学生は最後まで続けることを強い動機にして部活動に参加していると考えられる。

単純集計とクロス集計の結果、スポーツ実績非評価群と比較したスポーツ実績評価群のレギュラーにおける割合は 78.9%、準レギュラーにおいては 61.3%であり、非レギュラーは 23.5%だった。また、部活動への参加動機に関する質問 25 項目を因子分析した結果、5 因子(「回避」因子、「固執」因子、「達成」因子、「自由・平等性」因子、「社会的有用性」因子)20 項目が抽出された。この結果から得られた因子得点を用いて 2 つの入学形態による t 検定、2 つの入学形態を各属性(性別、学年、学部、競技タイプ、レギュラー区分)に分けて一元配置分散分析によって分析をした結果、「自由・平等性」動機(自由な雰囲気に関する動機)、

「社会的有用性」動機(就職に関する動機)の平均値はスポーツ実績評価群の学生が有意に高くなる傾向にあった。また、スポーツ実績非評価群の学生は「固執」動機(最後まで部活動を継続することに関する動機)が有意に高い値を示す傾向にあった。これらの結果から、仮説 1～4 を全て立証できた。

第 4 章 まとめ

本研究から部活動において、指導者は各部員の属性を見極めながら指導にあたる必要性が示

唆された。スポーツ実績非評価群の学生にとっては、部内の役職や立場などの関係から部活に自由さを感じにくい傾向があり、学生に対してそれぞれの役割や立場の重要性の説明が重要である。スポーツ実績評価群の選手はこれまでの進路選択を競技実績に委ねてきたことから、競技の継続は大きな選択肢であるといえる。選手に対しては競技のことだけでなく、そのセカンドキャリアについても指導をし、しっかりとした見識を明示する必要があるといえる。以上を本研究からの提言としたい。